

1 四柱推命学の概要

1 四柱推命学とは

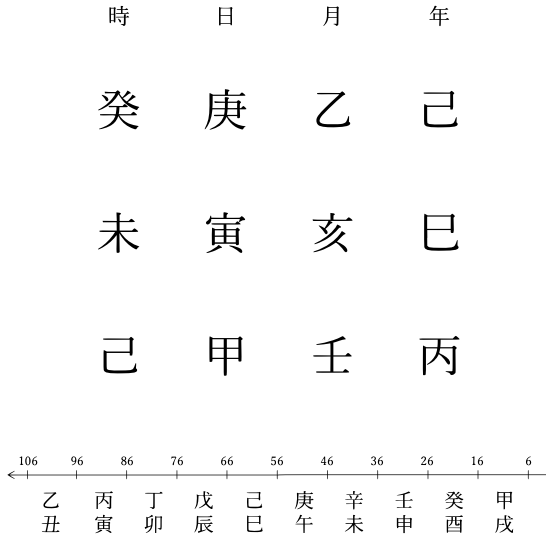
四柱推命学は、人間が生まれた年・月・日・時に基づいて、その先天運命（持って生まれた質）と後天運勢（一生にわたる運氣の流れ）とを推測する学問です。中国思想の陰陽五行説に端を発し、日本には文政年間（1818年頃）に中国から渡来したと考えられています。

中国では、古来より数々の思想家たちが、天体の運行、暦の記録、方角の指示、時間の測定などの複雑な事象を陰陽五行に則って体系化してきました。そして、四柱推命学は、その膨大な成果の積み上げに基づく「学問」として、長い歴史に耐えて現代まで発展を遂げてきました。成果と歴史の裏付けがあるからこそ、近代的な西洋の学問と同じように奥深く、東洋の学問の一つとして尊重されるべきものと言えます。

四柱推命学はあくまで学問であるため、靈感などの神がかり的な素養を必要としません。理屈を覚え、所定の手順に習熟すれば、誰でも先天運命と後天運勢を推測できます。つまり、推測の方法論がすべて言語化されているのです。もちろん、その手順は単純ではなく、習熟には時間を要しますし、推測の巧拙に応じてその精度は変わります。しかし、言語化により「誰でもできる」ことは1つの大きなポイントと言えるでしょう。

運命・運勢は、命式・大運を求めた上で、それらを解釈することによって推測できます。ここで、命

式は、生年・月・日・時を列とした一種の表のように記述され、大運は、運勢を示す干支かんしを書き添えた一種の数直線のように記述されます。例えば、平成元年11月26日13時45分生まれの男性からは、次の命式（上部）と大運（下部）が求められます。



命式は干支で表され、これがその人の持って生まれた先天運命を表します。命式を求める方法は機械的です。四柱推命学を志す人は、まずこれを求める方法に習熟する必要があります。

大運にもさまざまな要素が含まれ、これがその人の後天運勢を表します。命式と同様に、大運を求める方法も機械的です。やはりこれを求める方法にも習熟する必要があります。

命式・大運を求めた後、これらを詳細に解釈することによって、その人の運命・運勢を推測します。これにより、その人の性質、適職指向、人事・事相、肉親関係など、多岐にわたる事柄を明らかにできます。

例えば、先の男性は、才智に富み活動家と命式から推

測できます。また、社交的で人間関係も良好ですが、積極性に欠けるところに注意が必要となるでしょう。さらに、45歳までは良い運氣が続きますが、それ以降は注意が必要となるため、若い時にできるだけ努力して将来に備えるべきことが、大運から推測できます。

このように、四柱推命学は、人間が生まれた年・月・日・時に基づいて、その先天運命と後天運勢とを推測する方法論です。各自の生まれながらに持っている質を知り、運氣の流れを知り、人生航路で起きるさまざまな出来事や受難に対処する方法を考えるものです。

命式は、生年・月・日・時から一意に求められ、これは「持って生まれた運命」として換えようがありませんが、各人の人生が生まれながらに決定されているわけでは当然ありません。先天の運命が大輪の種子であったとしても、努力の時期を逸すれば花は咲きませんし、小さな草花の種子であったとしても、条件が整えば立派な花を咲かすことができます。四柱推命によって自分をよく知り、生涯の大局を見据えて、各自に応じた努力を積み重ねることにより、その後の運勢は必ず開かれるでしょう。

2 五術体系における位置付け

中国には、古来より「五術体系」と呼ばれる分類があります。命・めい・ぼく・そう・い・さん相・ぼく・そう・い・さん相・ぼく・そう・い・さん相・ぼく・そう・い・さん相の分類があり、これらはそれぞれ次の意味を持ちます。

命^{めい} 命術のことで、生年・月・日・時に基づいて、先天運命と後天運勢とを推測する方法を指します。

四柱推命はこの「命」に分類されます。その他、紫微斗数^{しびとすう}、九星気学^{きゅうせいきがく}などがこれにあたります。

ト^{ぼく} ト術^{せんぼく}（占ト）のことで、偶然にあらわれた象徴を用いて、事柄や事態の成り行きを占う方法を指します。

周易^{しゅうい}・断易^{だんえき}・梅花心易^{ばいかしんえき}などがこれにあたります。タロット・ルーンなども占トに該当するでしょう。

相^{そう} 相術のことで、対象の姿・形から、その対象の状態や運勢を占う方法を指します。主なものとして、

手相・人相・姓名判断・風水などがこれにあたります。

医^い 中国医術のことで、鍼灸・漢方・整体術などがこれにあたります。

山^{ざん} 大地自然の気をもらうことによって習得する術の総称で、気功・呼吸法・食事療法などがこれにあたります。

巷ではよく混同されていますが、四柱推命学は「占ト（占い）」ではありません。前述したとおり、「理屈」を積み上げて運命・運勢を推測する「命」であって、占トのように「偶然」に頼る「ト」とは異なります。¹

そのため、「この時期にはこんなことが起こる」「この日は注意しなければ悪いことが起こる」「この時

¹ そのため、サイコロやカードなどの小道具は一切使いません。

期に亡くなる」など、将来に起きる出来事を予言できるわけではありません。四柱推命学は、看命^{かんめい}できる範囲は明確に決まっており、これを逸脱して不確かな推測を振り回すことを嫌います。²

四柱推命学を真に志すのであれば、占卜との違いを理解した上で、理論・理屈から外れたことを云々することは控える自戒が必要です。

3 概要のまとめ

四柱推命学は「人間を知る学問」です。生年・月・日・時だけから、「命式」という航海図を描き、「大運」という天気予報を得る命学^{めいがく}です。

こんな格言があります。

人事を尽くして天命を待つは常人なり
天命を知って人事を尽くすは達人なり

四柱推命学によって、各人が生まれながらに持っている天命（質）をよく知り、自分の生涯のうち、い

² 四柱推命学は「占い」ではないことから、対象を看^みることを「占う」とは言いません。「看命する」「鑑定する」などと言います。

つ花が咲くか、いつ注意すればよいかを予測します。そして、発展運の時は大いに伸ばし、凶運の時は大難を小難に止める人事を尽くせば、人生の「達人」といえるかもしれません。

それでは、奥深い四柱推命学の世界に足を踏み入れましょう。本書がその正しい第一歩となることを願っています。

2 予備知識

この章では、四柱推命学を学び進めるために必要となる最も基本的なことを解説します。普段は馴染みのない用語が多数出てきますが、少しずつ慣れていきましょう。

1 陰陽五行と干支

陰陽五行説

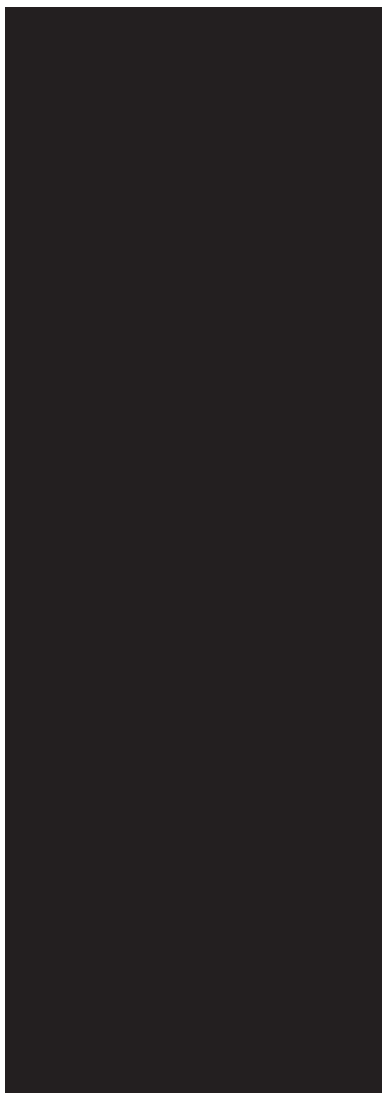
陰陽説は、世界が陰と陽のバランスから成り立っていると考える思想です。例えば、「太陽と月」「天と地」「昼と夜」「男と女」「裏と表」など、自然界の全てのものを「陰」と「陽」の相反する二つの要素でとらえます。そして、これらが互いに消長し、調和することによって自然界の秩序が保たれていると解釈します。

一方で、五行説は、万物が木・火・土・金・水の五つの要素（五行）から構成されていると考える思想です。そして、これらの要素の盛衰・消長によって、この世のすべてが循環して進展すると解釈します。そして「陰陽五行説」は、陰陽説と五行説とが結びついた古代中国の思想です。四柱推命学では、この陰陽五行説に基づいて、陰陽・五行の均衡・不均衡を検討することが、最大のポイントとなります。

十干

陰陽説によれば、すべてのものに陰陽がありますので、木・火・土・金・水の五行にもそれぞれ陰陽があることになります。

ここで、中国の慣習にしたがって陽を「兄」に、陰を「弟」に対応づけ、これらの陰陽五行の十種類を漢字で表現すると、次の表のようになります。



例えば、「木」の五行の陽は「木の兄」となり、「甲」の漢字で表現します。また、「金」の五行の陰

は「金の弟」となり、「辛」の漢字で表現します。³

このように、陰陽五行の十種類を漢字で表現したものを「十干」と呼びます。

また、甲・丙・戊・庚・壬（兄のグループ）を「陽干」と呼び、乙・丁・己・辛・癸（弟のグループ）を「陰干」と呼びます。

四柱推命学では、この十干が一つの基礎になりますので、まずは漢字の表記と読みを正しく覚えておく必要があります。

十二支

十二支は、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌、亥の総称です。日本では年を表す干支として馴染み深いものです。

十二支にも陰陽・五行の分類があり、それぞれ次の表のようになります。

また、子・寅・辰・午・申・戌を「陽支」と呼び、丑・卯・巳・未・酉・亥を「陰支」と呼びます。四柱推命学では、命式・大運をすべて十干と十二支で表しますので、十干だけでなく、十二支の表記と読みも覚えておく必要があります。

³ 「金」が変則的な読み方（ごん、か）になることに注意しましょう。

十二支	陰陽	五行
子 <small>ね</small>	陽	水 <small>すい</small>
丑 <small>うし</small>	陰	土 <small>ど</small>
寅 <small>とら</small>	陽	木 <small>もく</small>
卯 <small>う</small>	陰	
辰 <small>たつ</small>	陽	土 <small>ど</small>
巳 <small>み</small>	陰	火 <small>か</small>
午 <small>うま</small>	陽	
未 <small>ひつじ</small>	陰	土 <small>ど</small>
申 <small>さる</small>	陽	金 <small>ごん</small>
酉 <small>とり</small>	陰	
戌 <small>いぬ</small>	陽	土 <small>ど</small>
亥 <small>い</small>	陰	水 <small>すい</small>

干支かんし

十干じっかんと十二支じゅうにしを合わせた十干十二支じっかんじゅうにしを「干支かんし」と略して呼びます。干支えとと漢字が同じですが、意味も読み方も異なりますので注意しましょう。⁴

陽干と陽支、陰干と陰支を任意に組み合わせると、六〇通りの干支を構成できます。これを表にしたものを「六十干支表ろくじっかんし」と呼びます。⁵

中国では、古代からこの六十干支を用いて暦を記録していました。私たちが普段使う近代西洋の「天文暦てんもんれき」

⁴ 以後「干支」はすべて「かんし」と読みます。

⁵ 表の最下段に記載の「空亡くうぼう」については、後の章で詳しく説明します。

に対して、これを「干支暦^{かんしれき}」と呼びます。

六十干支は、表のように「甲子^{きのえね}」(1) から始まり「癸亥^{みずのとい}」(60) で終わります。一巡すると、また「甲子^{きのえね}」から始まり、この六十干支表の番号順に、年・月・日・時の干支が延々と巡ります。

例えば、最近では大正13年(1924年)が「甲子^{きのえね}」であり、それより六〇年後の昭和59年(198

51 きのえとら 甲寅	41 きのえたつ 甲辰	31 きのえうま 甲午	21 みずのえさる 甲申	11 きのえいぬ 甲戌	1 きのえね 甲子	
52 きのとう 乙卯	42 きのとみ 乙巳	32 きのとひつじ 乙未	22 きのととり 乙酉	12 きのとい 乙亥	2 きのとうし 乙丑	
53 ひのえたつ 丙辰	43 ひのえうま 丙午	33 ひのえさる 丙申	23 ひのえいぬ 丙戌	13 ひのえね 丙子	3 ひのえとら 丙寅	
54 ひのとみ 丁巳	44 ひのととり 丁未	34 ひのとうし 丁酉	24 ひのとい 丁亥	14 ひのとう 丁丑	4 ひのとう 丁卯	
55 つちのえうま 戊午	45 つちのえさる 戊申	35 つちのえいぬ 戊戌	25 つちのえね 戊子	15 つちのえとら 戊寅	5 つちのえたつ 戊辰	
56 つちのとひつじ 己未	46 つちのととり 己酉	36 つちのとい 己亥	26 つちのとうし 己丑	16 つちのとう 己卯	6 つちのとみ 己巳	
57 かのえさる 庚申	47 かのえいぬ 庚戌	37 かのえね 庚子	27 かのえとら 庚寅	17 かのえたつ 庚辰	7 かのえうま 庚午	
58 かのととり 辛酉	48 かのとい 辛亥	38 かのとうし 辛丑	28 かのとう 辛卯	18 かのとみ 辛巳	8 かのとひつじ 辛未	
59 みずのえいぬ 壬戌	49 みずのえね 壬子	39 みずのえとら 壬寅	29 みずのえたつ 壬辰	19 みずのえうま 壬午	9 みずのえさる 壬申	
60 みずのとい 癸亥	50 みずのえうし 壬丑	40 みずのとう 癸卯	30 みずのとみ 癸巳	20 みずのとひつじ 癸未	10 みずのととり 癸酉	
子丑	寅卯	辰巳	午未	申酉	戌亥	空亡

4年)も「甲子^{きのえね}」でした。同様に、2044年も「甲子^{きのえね}」になります。余談ですが、甲子園球場は、大正13年の「甲子^{きのえね}」年に完成したことにちなんで、その名が付けられました。六〇歳を「還暦^{かえ}」と呼ぶのも、「暦^{かえ}が還る」ことからきています。

また、令和3年(2022年) 8月は「己酉^{つちのとじ}」であり、同月17日は「壬寅^{みずのえとら}」でした。そのため、六〇月後の令和8年(2027年) 8月も「己酉^{つちのとじ}」であり、六〇日後の10月16日も「壬寅^{みずのえとら}」でした。さらに、令和元年(2019年) 5月13日13時0分は「癸未^{みずのとひつじ}」だったため、六〇時間後の同月18日13時0分も「癸未^{みずのとひつじ}」でした。

このように、年・月・日・時の干支が、古代から六〇サイクルにより休みなく巡っています。

四柱推命学では、天文暦で表される生年・月・日・時を、干支暦で表される生年・月・日・時に置き換えることが最初の一步となります。

2 五行と季節の関係

木・火・土・金・水の五行には、次の表のようにそれぞれ季節が対応づけられています。

「木」が青葉となり茂る季節が春、「火」が燃えるように暑くなる季節が夏、「金」が土の中で実る季節が秋、「水」が冷たく凍る季節が冬に対応します。「土」は、それぞれの季節の終わりを表し、これを

五行	季節
木 <small>もく</small>	春
火 <small>か</small>	夏
土 <small>ど</small>	土用
金 <small>ごん</small>	秋
水 <small>すい</small>	冬

「土用」といいます。⁶

四柱推命学は季節を重視します。人間の運勢にも「季節」があり、その移ろいに応じて人生にさまざまな変化をもたらすと考えるからです。

例えば、大運に「春」が巡った場合、命式に含まれる木の五行（甲、乙）が旺じます。⁷

同様に、「夏」が巡った場合は火の五行（丙、丁）が、「秋」が巡った場合は金の五行（庚、辛）が、「冬」が巡った場合は水の五行（壬、癸）が旺じます。そして、それぞれの季節の終わり（土用）には土の五行（戊、己）が旺じます。その結果、命式において他の五行との相対的な関係がダイナミックスに変化し、これが運勢の吉凶を決定づけることになります。

⁶ いわゆる「土用の丑」は、暦の上での夏（七月）の土用（立秋まえの十八日間）をいいます。

⁷ 「旺じる」とは、その五行の作用が大きくなることをいいます。

3 予備知識のまとめ

四柱推命学の予備知識として、五行、十干、十二支、季節について説明しましたが、この内容をあらためて表にすると次のようになります。

十干	十二支	五行	陰陽	季節
甲	寅	木	陽	春
乙	卯		陰	
丙	午	火	陽	夏
丁	巳		陰	
戊	辰・戌	土	陽	土用
己	丑・未		陰	
庚	申	金	陽	秋
辛	酉		陰	
壬	子	水	陽	冬
癸	亥		陰	

まとめると、まず五行（木・火・土・金・水）があり、これらの陰陽によって十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）が導かれます。そして、この十干と十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）とを合わせて「干支」と呼びます。人間の先天運命を表す命式も後天運勢を表す大運も、すべてこの干支で表現されます。

五行には季節が対応づけられています。木が春、火が夏、土が土用、金が秋、水が冬です。そして、十干では甲、乙が、十二支では寅、卯が「春」に対応します。同様に、丙、丁、巳、午が「夏」、戌、己、丑、辰、未、戌が「土用」、庚、辛、申、酉が「秋」、壬、癸、亥、子が「冬」に対応します。このように、四柱推命学は陰陽五行説に立脚しており、これに基づいて陰陽・五行の均衡・不均衡を検討することがすべての基本となります。そのため、まずは五行・十干・十二支、およびこれらの季節との対応を、予備知識としてしっかり覚えておきましょう。

3 命式

命式は、生年・月・日・時を「干支」に置き換え、「年柱」「月柱」「日柱」「時柱」として組み立てたものです。

年	月	日	時
戊	癸	丁 ^{日干}	丁
寅	亥 ^{月支}	丑	未
甲	壬	己	己

天干

地支

藏干

男性の命式を「男命」、女性の命式を「女命」といい、主に先天運命を推測する（推命する）ために用います。このように、年・月・日・時に対応する干支を「四つの柱」として推命するため、「四柱推命」と称します。命式において、上段の干を「天干」、中段の支を「地支」、下段の干を「藏干」と呼びます。特に重要な干支は、日柱に位置する天干と、月柱に位置する地支であり、これらをそれぞれ「日干」、「月支」と略して呼びます。⁸

命式は、天文暦で表される生年・月・日・時を、干支暦で表される生年・月・日・時に置き換えることで四柱干支を求め、次に藏干を導くという手順で構成するため、ここではこの順序で説明します。

⁸ 月支ほど頻出ではありませんが、年柱地支を「年支」、日柱地支を「日支」、時柱地支を「時支」と呼ぶことがあります。また、日干のことを「日元」「命主」「日主」ということもあります。

1 四柱干支の求め方

年の干支の求め方

和暦から年干支を得る手順は、次のとおりです。

1 昭和であれば2を足し、平成であれば5を足し、令和であれば35を足す（足した数が60を超過している場合は60を引く）

2 足した数に対応する干支を六十干支表から得る

例えば、平成10年の場合、10に5を足すと15です。そこで、六十干支表の15に対応する干支「戊寅」を得ます。

昭和59年の場合、2を足すと61となり、60を超えてしまいます。この場合はさらに60を引いて1とし、六十干支表の1に対応する干支「甲子」を得ます。

なお、西暦から年干支を求める手順は、次のとおりです。

1 3を引く

2 残りの数から直近の60の倍数を引く

3 引いた数に対応する干支を六十干支表から得る

例えば、1998年の場合、まず3を引くと1995となり、ここから1980（直近の60の倍数）を引くと15です。そこで、六十干支表の15に対応する干支「戊寅」を得ます。

年柱の干支を求める場合、注意しなければならないことがあります。それは、立春前までに誕生した人については、前年の干支を採用するということです。立春とは、暦の上で春に入る日であり、節分の翌日のことです。なお、暦の上での各月の始まりに入ることを「せうい節入りする」といいます。

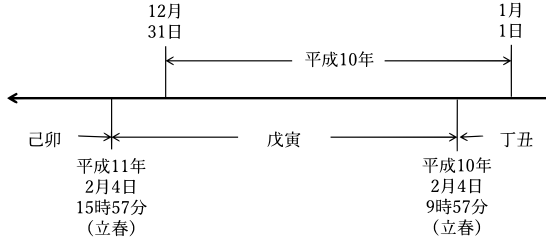
この注意事項を、上の図を用いて説明します。

一般に、平成10年は、その年の1月1日から12月31日までのことです。

一方で、四柱推命学では、平成10年として「戊寅」の年柱を採用するのは、平成10年2月4日9時57分の節入りから、平成11年2月4日15時57分の節入りより前までです。⁹

例えば、平成10年1月は、まだ「戊寅」には節入りしていませんので、その前年の「丁丑」を採用します。同様に、平成11年2月1日も、まだ「己卯」に節入りしていませんので、その前年の「戊寅」を採用します。

このように、1月から2月の立春より前に生まれた人の年柱の求め方は変則



⁹ 立春の日付と正確な時刻については、国立天文台が発行する「理科年表」で毎年発表されています。

的になるので、注意が必要です。

月の干支の求め方

月の干支は、次の月干支表を用いて求めます。

【表3-1】

平成10年11月を例として説明します。

前述のとおり、年の干は「戊」でしたので、月干支表の「戊」の行を参照します。この表によれば、「戊」の「11月亥」は「癸」です。そのため、平成10年11月の月干支は「癸亥」になります。

次に、昭和61年9月を例として説明します。

六十干支表によれば、 $61 + 2 - 60 \parallel 3$ の干支は「丙寅」ですので、これが年干支になります。月干支表の「丙」の行において「9月酉」は「丁」です。そのため、昭和61年9月の月干支は「丁酉」になります。

最後に、平成8年1月を例として説明します。

六十干支表によれば、 $8 + 5 \parallel 13$ の干支は「丙子」です。しかし、1月はまだ節入りしていないので、年干支はその前年の「乙亥」になります。月干支表の「乙」の行において「1月丑」は「己」です。そのため、平成8年1月の月干支は「己丑」になります。

月干支を求める場合も、毎月の節入りを考慮する必要があることに注意が必要です。つまり、毎月の節入り前までに誕生した人については、前月の干支を採用するという事です。¹⁰

この注意事項を、次の図を用いて説明します。

【図3-3】

一般に、平成10年11月は、11月1日から11月30日までのことです。

一方で、四柱推命学では、平成10年11月「癸亥」の月柱を採用するのは、平成10年11月8日0時8分の節入り（立冬）から、同年12月7日17時2分の節入り（大雪）より前までです。

例えば、平成10年11月5日は、まだ「癸亥」には節入りしていませんので、その前月の「壬戌」を採用します。同様に、同年12月2日は、まだ「甲子」に節入りしていませんので、「癸亥」を採用します。

このように、各月の上旬に生まれた人の月柱の求め方は変則的になるので、注意が必要です。

なお、月干支表の○内数字は「標準節入り」です。例えば、毎年8月の節入り（立秋）は、正確な時刻は別として「だいたい8日」です。そのため、「8月申」の下に「⑧」と記載しています。

この標準節入日を参考にして、節入りの有無を大まかに検討し、当月の干支を採用するか、前月の干支を採用するかを判断すればよいでしょう。

¹⁰ 毎月の節入りは、小寒（1月6日頃）、立春（2月4日頃）、啓蟄（3月6日頃）、清明（4月5日頃）、立夏（5月6日頃）、芒種（6月6日頃）、小暑（7月7日頃）、立秋（8月8日頃）、白露（9月8日頃）、寒露（10月9日頃）、立冬（11月8日頃）、大雪（12月7日頃）です。それぞれの日付と正確な時刻については、「理科年表」で発表されています。

日の干支の求め方

日干支は、次の生日基数表を用いて求めます。

【表3-2】

日干支を求める手順は、次のとおりです。

- 1 生日基数表から年月に対応する基数を得る
- 2 その基数に日の数を足す（足した数が60を超過している場合は60を引く）
- 3 足した数に対応する干支を六十干支表から得る

平成10年11月10日を例として説明します。

生日基数表によれば、平成10年11月に対応する基数は「48」です。これに日の数（10）を足すと「58」です。六十干支表において「58」に対応する干支は「辛酉」ですので、平成10年11月10日の干支は「辛酉」になります。

次に、昭和61年9月27日を例として説明します。

生日基数表によれば、昭和61年9月に対応する基数は「44」です。これに日の数（27）を足すと「71」です。60を超えているので、71から60を引いて11を得ます。六十干支表において「11」に対応する干支は「甲戌」ですので、昭和61年9月27日の干支は「甲戌」になります。

時の干支の求め方

時の干支は、次の時干支表を用いて求めます。

【表3-3】

平成10年11月10日13時45分を例として説明します。

前述のとおり、日干は「辛」でしたので、時干支表の「辛」の行を参照します。この表によれば、「辛」の「13時より未」は「乙」です。そのため、平成10年11月10日13時45分の時干支は「乙未」になります。次に、昭和61年9月27日8時51分を例として説明します。

前述のとおり、日干は「甲」でしたので、時干支表の「甲」の行を参照します。この表によれば、「甲」の「7時より辰」は「戊」です。そのため、昭和61年9月27日8時51分の時干支は「戊辰」になります。

四柱干支の求め方のまとめ

4つの例題をとおして、四柱干支の求め方をまとめましょう。

(1) 昭和58年(1983年) 8月21日14時13分

まず、六十干支表から昭和58+2=60で年干支「癸亥」を得ます。次に、月干支表の「癸」の行を参照すると、「8月申」は「庚」です。ここから月干支「庚申」を得ます。

生日基数表によれば、昭和58年8月に対応する基数は「57」ですので、 $57 + 21 \div 60 \parallel 18$ です。六十干支表において「18」に対応する干支は「辛巳」ですので、これが日干支になります。最後に、時干支表の「辛」の行を参照すると、「13時より未」は「乙」です。そのため、ここから時干支「乙未」を得ます。まとめると、昭和58年8月21日14時13分生まれの四柱干支は、次のとおりです。

【図3-4】

(2) 平成7年(1995年) 1月27日9時21分

まず、六十干支表から平成7+5 \parallel 12で年干支「乙亥」を得ます。しかし、1月はまだ節入りしていないため、前年の「甲戌」が年干支となります。次に、月干支表の「甲」の行を参照すると、「1月丑」は「丁」です。ここから月干支「丁丑」を得ます。

生日基数表によれば、平成7年1月に対応する基数は「28」ですので、 $28 + 27 \parallel 55$ です。六十干支表において「55」に対応する干支は「戊午」ですので、これが日干支になります。最後に、時干支表の「戊」の行を参照すると、「9時より巳」は「丁」です。そのため、ここから時干支「丁巳」を得ます。

まとめると、平成7年1月27日9時21分生まれの四柱干支は、次のとおりです。

【図3-5】

(3) 平成9年(1997年) 6月3日21時22分

まず、六十干支表から平成9+5 \parallel 14で年干支「丁丑」を得ます。次に、6月の標準節入日を参照すると「6日」であるため、6月3日はまだ節入りしていないことが分かります。そのため、月干支表の

「丁」の行における「5月巳」を参照し、「乙」を得ます。月干支は「乙巳」です。

生日基数表によれば、平成9年6月に対応する基数は「10」ですので、 $10 + 3 \equiv 13$ です。六十干支表において「13」に対応する干支は「丙子」ですので、これが日干支になります。最後に、時干支表の「丙」の行を参照すると、「21時より亥」は「己」です。そのため、ここから時干支「己亥」を得ます。

まとめると、平成9年6月3日21時22分生まれの四柱干支は、次のとおりです。【図3-6】

(4) 昭和57年(1982年) 1月4日2時23分

まず、六十干支表から昭和57+2 \equiv 59で年干支「壬戌」を得ます。しかし、1月はまだ節入りしていないため、前年の「辛酉」が年干支となります。次に、1月の標準節入日を参照すると「6日」であるため、1月4日はまだ節入りしていないことが分かります。そのため、月干支表の「辛」の行における「12月子」を参照し、「庚」を得ます。月干支は「庚子」です。

生日基数表によれば、昭和57年1月に対応する基数は「20」ですので、 $20 + 4 \equiv 24$ です。六十干支表において「24」に対応する干支は「丁亥」ですので、これが日干支になります。最後に、時干支表の「丁」の行を参照すると、「1時より丑」は「辛」です。そのため、ここから時干支「辛丑」を得ます。まとめると、昭和57年1月4日2時23分生まれの四柱干支は、次のとおりです。

【図3-7】

2 蔵干の導き方

ここまでで、四柱干支（天干・地支）が求められるようになりました。ここから、次は「蔵干（ぞうかん）」を導きます。

蔵干は、月律（月のリズム）による運命の差異を表す干です。四柱推命学では、例えば、同じ平成10年（1998年）11月の「癸亥」月生まれでも、その月の前半（初気^{しよき}）に生まれるか、後半（本気^{ほんき}）に生まれるかで運命が異なり、その違いが地支に含まれていると考えます。

【図3-8】

そこで、4つの支がそれぞれ蔵している干（蔵干）を導き出すことによって、その運命の差異を命式に反映させます。

蔵干は、次の蔵干表を用いて導きます。

【図3-9】

平成3年（1991年）8月16日9時30分生まれの人の蔵干を導く例を説明します。

【図3-10】

まず、年支は「未」ですので、蔵干表の「未」欄を参照すると、「丁9.3」と「己」と書かれています。この「9.3」は節入りからの経過日時を表します。つまり、節入りから誕生日時までの経過日時が9日と3時間までであれば、「丁」を蔵干とし、それ以降であれば「己」を蔵干とすることを意味します。

月干支表によれば、8月の標準節入日は8日ですので、8月16日9時30分は、節入りからだいたい8日と9時間30分です。これは「9日と3時間まで」に該当するため、年支蔵干は「丁」になります。

次に、月支は「申」ですので、蔵干表の「申」欄を参照すると、「戊^{7.2}」と「庚」と書かれています。8日と9時間30分は「7日と2時間以降」に該当するため、月支蔵干は「庚」になります。

さらに、日支は「午」ですので、蔵干表の「午」欄を参照すると、「丙^{10.0}」、「己^{20.1}」、「丁」と書かれています。8日と9時間30分は「10日と0時間まで」に該当するため、日支蔵干は「丙」になります。

最後に、時支は「巳」ですので、蔵干表の「巳」欄を参照すると、「戊^{7.2}」と「丙」と書かれています。8日と9時間30分は「7日と2時間以降」に該当するため、時支蔵干は「丙」になります。

ここで、「午」の蔵干のみ変則的であることに注意しましょう。つまり、蔵干表に記載のとおり、節入りから誕生日時までの経過日時が、10日と0時間までであれば「丙」、10日と0時間以降かつ20日と1時間までであれば「己」、20日と1時間以降であれば「丁」を蔵干とします。¹¹

次に、平成2年（1990年）9月25日8時41分生まれの人の蔵干を導く例を説明します。

【図3—二】

まず、月干支表によれば、9月の標準節入日は8日ですので、9月25日8時41分は、節入りからだいたい13日と8時間41分です。年支は「午」ですので、蔵干表の「午」欄を参照すると、「丙^{10.0}」、「己^{20.1}

¹¹ 午のみ蔵干が変則的となる詳しい理屈は、ここでは割愛します。

「、」「丁」と書かれています。13日と8時間41分は「10日と0時間以降かつ20日と1時間まで」に該当するため、年支蔵干は「己」になります。

次に、月支は「酉」ですので、蔵干表の「酉」欄を参照すると、「庚^{10.3}」と「辛」と書かれています。

13日と8時間41分は「10日と3時間以降」に該当するため、月支蔵干は「辛」になります。

さらに、日支は「巳」ですので、蔵干表の「巳」欄を参照すると、「戊^{7.2}」、「丙」と書かれています。

13日と8時間41分は「7日と2時間まで」に該当するため、日支蔵干は「丙」になります。

最後に、時支は「辰」ですので、蔵干表の「辰」欄を参照すると、「乙^{9.3}」と「戊」と書かれています。13日と8時間41分は「9日と3時間以降」に該当するため、時支蔵干は「戊」になります。

3 命式の求め方のまとめ

四柱干支（天干・地支）を求めて蔵干を導くと、命式が完成します。これで、その人が持って生まれた運命を推測する準備が整いました。その方法は後で詳しく説明するとして、最後に命式の求め方をまとめます。

1 年干支を求める

- (a) 昭和であれば2を足し、平成であれば5を足し、令和であれば35を足す（足した数が60を超過している場合は60を引く）

- (b) 足した数に対応する干支を六十干支表から得る

※節入りの有無に注意すること

2 月干支を求める

- (a) 年柱天干に対応する干支を月干支表から得る

※節入りの有無に注意すること

3 日干支を求める

- (a) 生日基数表から年月に対応する基数を得る

- (b) その基数に日の数を足す（足した数が60を超過している場合は60を引く）

- (c) 足した数に対応する干支を六十干支表から得る

4 時干支を求める

- (a) 日干に対応する干支を時干支表から得る

5 蔵干を導く

- (a) 節入りから誕生日時までの経過日時と蔵干表に基づいて、各支が蔵する干を導く

命式の求め方は機械的です。四柱推命学を志す人は、まずこれを求める方法に習熟する必要がありますが、ま

すので、何度も練習しましょう。

4 五行配分

四柱干支が出揃えば、五行の配分が明らかになります。例えば、平成元年二月26日13時45分生まれの四柱干支は、次のとおりであり、五行配分は、木2、火1、土2、金1、水2であることが分かります。¹²

【図3—12】

五行配分は、命式を解釈する上で重要な情報になります。例えば、右の例のように、四柱干支に木火土金水の五行がすべて揃っている場合、その性格は穏やかな傾向があり、人生に多少の動揺があってもその衝撃を吸収できるため、浮き沈みの緩やかな生涯送れると一応解釈されます。

なお、このように五行が揃っていることを「五行周流^{ごぎょうしゅうりゅう}」と呼びます。中庸と均衡を重視する四柱推命学では、この状態を大変喜びます。¹³

逆に、木火金水が3つ以上配分されている場合、または、土が4つ以上配分されている場合、その五行は「多い」と判断され、なんらかの偏りがあると分かります。

¹² 十干十二支と五行との関係は、第2章を参照。

¹³ 全人口の約15パーセントの人が五行周流に恵まれているといわれます。

5 空亡（天中殺）

六十干支表のように、十干と十二支を組み合わせていくと、支が二つ余ります。この干のない支を空亡（天中殺）といいます。てんちゅうさつ「空しく亡びる」の字義どおり、空亡が現れた柱はその働きが弱まります。

空亡は、六十干支表の最下段に記載されており、日干支から求められます。例えば、先の例では、日干支は「27 庚寅」であるため、その列の六十干支表の最下段を参照すると、「午未」が空亡であることが分かります。

【図3—13】

四柱干支を再度確認すると、時支に「未」があるため、時柱が空亡していることが分かります。

【図3—14】

命式に空亡が現れた場合の看命方法については、後の章で詳しく説明します。ここでは「時柱は空しく亡びているため、その働きが弱まる」と覚えておきましょう。

6 調候

ちようこう調候とは、日干の季節バランスのことです。

7

まとめ

4 大運

大運^{だいうん}は、一〇年ごとの運氣の流れ（後天運勢）を干支で表現したものです。月柱の干支が大運の出発点となり、以後は立運年数から一〇年ごとに、六十干支表にしたがって大運の干支が変わっていきます。ここで、大運が六十干支表にしたがって順に進んでいくのを「順運^{じゅんうん}」といいます。逆に、六十干支表を遡^{さく}って進んでいくのを「逆運^{ぎやくうん}」といいます。¹⁴

例えば、月柱干支が「己丑」の順運であった場合、大運は「庚寅」「辛卯」「壬辰」「癸巳」…の順に進んでいきます。逆に、逆運であった場合、大運は「戊子」「丁亥」「丙戌」「乙酉」…の順に遡^{さく}っていきます。

【図4-1】

1 大運の求め方

順運と逆運の決定と干支の配置

大運を求めるためには、まず、その人の運勢が順運か逆運かを決定しなければなりません。これには性別と年柱天干を利用します。

¹⁴ 順運・逆運に良し悪しはありません。つまり、順運であるから運勢が良いとか、逆運であるから運勢が悪いとかという意味はありません。

(1) 男性…年柱天干が「陽干」の場合↓順運

年柱天干が「陰干」の場合↓逆運

(2) 女性…年柱天干が「陽干」の場合↓逆運

年柱天干が「陰干」の場合↓順運

次の命式を例に用いて説明します。

【図4-2】

まず、年柱天干「庚」は陽干のため、この命式の持ち主が男性であれば順運、女性であれば逆運です。

次に、干支を配置します。月柱の干支が大運の出発点となりますので、この場合は「乙酉」から出発します。六十干支表の「乙酉」を参照すると、男性（順運）であれば、大運は「丙戌」「丁亥」「戊子」「己丑」「庚寅」…と進んでいくことが分かります。逆に、女性（逆運）であれば、大運は「甲申」「癸未」「壬午」「辛巳」「庚辰」…と遡っていくことが分かります。

次の命式を用いてさらに説明します。

【図4-3】

まず、年柱天干「辛」は陰干のため、この命式の持ち主が男性であれば逆運、女性であれば順運です。次に、干支を配置します。月柱の干支が大運の出発点となりますので、この場合は「丙申」から出発します。六十干支表の「丙申」を参照すると、男性（逆運）であれば、大運は「乙未」「甲午」「癸巳」「壬辰」「辛卯」…と遡っていくことが分かります。逆に、女性（順運）であれば、大運は「丁酉」「戊戌」

「己亥」「庚子」「辛丑」…と進んでいくことが分かります。

立運計算

次に、その人の大運が何歳から起算されるか（立運年数）を計算します。順運と逆運とで計算方法が異なるので、分けて説明します。

（１）順運の場合

生日より次の節入日までの日数を3で割り、1捨2入した数が立運年数となります。¹⁵
平成13年（2001年）10月18日17時30分生まれの女性を例にして、説明しましょう。

【図4-4】

まず、年柱天干に陰干「辛」を持つ女性のため、順運であることを確認します。次に、生日より次の節入日までの日数は、11月の標準節入日（月干支表の○内数字を参照）を考慮すると「だいたい21日」であることが分かります。そして、これを3で割ると「7余り0」となるため、立運年数は「7年」と計算できます。

月柱干支は「戊戌」ですから、六十干支表の「戊戌」を参照します。順運ですから、大運は「戊戌」の次の干支「己亥」から順番に進んでいきます。結果、この女性の大運は、次のとおりとなります。

¹⁵ 3で割って1捨2入する詳しい理屈は、ここでは割愛します。

【図4-5】

(2) 逆運の場合

生日より前の節入日までの日数を3で割り、1捨2入した数が立運年数となります。
平成4年（1992年）7月4日7時20分生まれの女性を例にして説明しましょう。

【図4-6】

まず、年柱天干に陽干「壬」を持つ女性のため、逆運であることを確認します。次に、生日より前の節入日までの日数は、6月の標準節入日を考慮すると「だいたい28日」であることが分かります。そして、これを3で割ると「9余り1」となるため、立運年数は「9年」と計算できます（余りの1は切り捨てます）。

月柱干支は「丙午」ですから、六十干支表の「丙午」を参照します。逆運ですから、大運は「丙午」の前の干支「乙巳」から順番に遡っていきます。結果、この女性の大運は、次のとおりとなります。

【図4-7】

大運は、その人が生涯歩いていかなければならない人生の道であり、運勢の起伏になります。一〇年ごとの運勢は、四柱命式と大運との組み合わせによって推測します。

2 年運

干支暦では、六十干支表にしたがって暦（干支）が巡ることを第二章で説明しました。四柱推命学においては、運勢を読むために年の干支も重要で、これを年運ねんうんと呼びます。

大運は人それぞれ異なりますが、年運はすべての人に共通です。例えば、令和5年は「癸卯」の年であり、令和6年は「甲辰」の年でした。各年の運勢は、四柱命式と大運・年運との組み合わせによって推測します。

つまり、先天運命（性格や人事・事相など）は四柱（生年・月・日・時）で推命するのに対し、後天運勢は六柱（生年・月・日・時・大運・年運）で推測することになります。

3 接木運

5 通変

通変は、二つの干の陰陽五行の関係を二字熟語で表現したものです。通変には、比肩、劫財、食神、傷官、偏財、正財、偏官、正官、偏印、印綬の十種類があります。それぞれの意味を説明する前に、まずは「五行の生剋関係」について解説します。

1 五行の生剋

五行の各要素の間には相対的な関係があります。木火土金水の並びにおいて、互いに隣り合う五行の間には、「生」の関係があります。具体的には、

- 木は燃えて火を生じ（木生火）
- 火は灰となって土を生じ（火生土）
- 土は固まって金を生じ（土生金）
- 金は冷えて水を生じ（金生水）
- 水は木を育て生じる（水生木）

という関係があります。

【図5-1】

一方、木もく火か土ど金こん水すいの並びにおいて、一つ飛ばして二つ先の五行、および、二つ飛ばして三つ先の五行との間には、「剋しく」の関係があります。具体的には、

- 木は土から養分を吸い上げ（木もく剋く土ど）
- 火は金を溶解し（火か剋く金こん）
- 土は水の流れをせき止め（土ど剋く水すい）
- 金は尖って木を切り倒し（金こん剋く木もく）
- 水は火を消す（水すい剋く火か）

という関係があります。

【図5-2】

いま「木」を基準にして考えると、「火」は「生じる五行」であり（木もく生しょう火か）、「土」は「剋す五行」であり（木もく剋く土ど）、「金」は「剋される五行」であり（金こん剋く木もく）、「水」は「生じられる五行」です（水すい生しょう木もく）。

【図5-3】

なお、「木」を基準にした場合、「木」は「同一の五行」であり、これを「比ひ和わ」の関係といえます。

2 通変の成り立ち

二つの干があったとき、一方の干から見て、他方の干の陰陽五行を二字熟語で整理したものが「通変」です。

例えば、「甲」を基準として「丙」の通変を考えると、甲（木）にとって丙（火）は「生じる五行」であり（木生火）、陰陽は「陽」と「陽」で同じです。この場合、丙の通変は「食神」になります。

同様に「辛」を考えると、甲（木）にとって辛（金）は「剋される五行」であり（金剋木）、陰陽は「陽」と「陰」で異なります。この場合、辛の通変は「正官」になります。

さらに「乙」を考えると、甲（木）にとって乙（木）は「同一の五行」であり、陰陽は「陽」と「陰」で異なります。この場合、乙の通変は「劫財」になります。

このように、甲から見て、他の干の陰陽五行を二字熟語（通変）で表現すると、次の十種類にまとめられます。

- 陽と陽の木生火↓食神
- 陽と陰の木生火↓傷官
- 陽と陽の木剋土↓偏財
- 陽と陰の木剋土↓正財
- 陽と陽の金剋木↓偏官

- 陽と陰の金きん剋く木もく↓正官
- 陽と陽の水すい生しょう木もく↓偏印
- 陽と陰の水すい生しょう木もく↓印綬
- 陽と陽の同一五行↓比肩
- 陽と陰の同一五行↓劫財

【図5-4】

今度は「癸」を基準にしましょう。この場合に「丙」の通変を考えると、癸（水）にとって丙（火）は「剋す五行」であり（水すい剋く火か）、陰陽は「陰」と「陽」で異なります。この場合、丙の通変は「正財せいざい」になります。

同様に「辛」を考えると、癸（水）にとって辛（金）は「生じられる五行」であり（金きん生しょう水すい）、陰陽は「陰」と「陰」で同じです。この場合、辛の通変は「偏印へんいん」になります。

さらに「乙」を考えると、癸（水）にとって乙（木）は「生じる五行」であり（水すい生しょう木もく）、陰陽は「陰」と「陰」で同じです。この場合、乙の通変は「食神しょくじん」になります。

このように、癸から見て、他の干の陰陽五行を二字熟語（通変）で表現すると、次の十種類にまとめられます。

- 陰と陰の水すいしょうもく生木↓食神
- 陰と陽の水すいしょうもく生木↓傷官
- 陰と陰の水すいこくか剋火↓偏財
- 陰と陽の水すいこくか剋火↓正財
- 陰と陰の土どこくすい剋水↓偏官
- 陰と陽の土どこくすい剋水↓正官
- 陰と陰の金きんしょうすい生水↓偏印
- 陰と陽の金きんしょうすい生水↓印綬
- 陰と陰の同一五行↓比肩
- 陰と陽の同一五行↓劫財

【図5-5】

これらの例では「甲」「癸」を基準にして考えましたが、他の干でも同様です。これを一覧表にすると、次のようになります。

【図5-6】

四柱推命学に習熟するためには、この表を見ることなく、二つの干の関係を即座に通変に置き換えられるようにならなければなりません。そのためには、まずは理屈を運用して変換できるようにしましょう。

例えば、「壬」を基準として「己」の通変を考える場合、

1 「水」は「土」に剋される（土剋水）^{（どくすい）}

2 「壬」と「己」は陰陽が異なる

3 剋される関係にあつて陰陽が異なる場合の通変は「正官」^{（せい官）}である

のように考えます。理屈の運用では変換に時間がかかりますが、次第にすべての組み合わせを記憶できるようにするため、即座に置き換えられるようになります。

3 命式・大運における通変

命式・大運を導いた後は、それらに含まれる干に対して、日干を基準とした通変をつけます。

例えば、平成13年10月18日17時0分生まれの女性の命式・大運には、次のように通変がつけられます。¹⁶

【図5-7】

このように、命式・大運に通変をつけた後は、各通変がどのような働きをするかを詳細に分析すること、で、看命を進めることになります。

¹⁶ 日干を基準として通変をつけるため、日干自身には通変はつきません。また、日干を基準とする理由は、四柱推命学においては、日干を「自分自身を表す干」と考えるからです。

4 良い通変と悪い通変

看命の原則として、良い通変と悪い通変を列挙します。

良い通変（吉神）
食神・偏財・正財・正官・印綬

悪い通変（凶神）
比肩・劫財・傷官・偏官・偏印

命式・大運に良い通変が多くあれば運が良く、悪い通変が多くあれば運が悪いという単純な話ではありません。命式の状態によっては、悪い通変が大運・年運に巡ることを喜ぶ場合もありますし、逆に、良い通変が巡ることを嫌う場合もあります。例えば、命式において日干が弱い場合は、良い通変である「正官」を嫌い、悪い通変である「偏印」を喜ぶことがあります。¹⁷

ここでは、一応の原則として、良い通変と悪い通変の分類を覚えておきましょう。

5 月支蔵干通変（用神・格）

原則として、月支蔵干の通変を用神といいます。先の例では、月支蔵干「戊」の通変は「偏財」です。から、この偏財が用神となります。

¹⁷ 通変による強弱については、第六章参照。

用神が決まると、その命式の格が決まります。先の例では、用神が「偏財」ですから、この命式の格は「偏財格」となります。格は、食人格、傷官格、偏財格、正財格、偏官格、正官格、偏印格、印綬格と、八種類あります。そして、日干と格との均衡・不均衡を検討することが、看命の基本となります。

ここで、均衡・不均衡を理解するために、四柱命式の全体を一つの「会社」と考えてみましょう。まず、日干は私自身であり、会社を代表する「社長」です。一方、用神は会社のナンバー2である「専務」です。

社長の力が強すぎて専務が腰巾着になり、会社がワンマン運営になると、その会社の未来は暗いでしょう。逆に、社長が頼りなくて専務の勝手が過ぎて、やはり暗いでしょう。社長と専務は同じくらいの存在感で均衡しており、互いに手を取り合って会社の発展に尽くすのが望ましいのです。四柱命式においては、日干と格とがバランス（均衡）していることが重要です。

うまくバランスしていない場合は、大運・年運による作用でバランスが取れることを喜びます。例えば、日干が強すぎて命式が「ワンマン会社」になっている場合は、日干の力が衰え、格の力が増す時期を喜びと考えます。逆に、日干が弱すぎて命式が「リーダーシップ不在の会社」になっている場合は、日干の力が増す時期を喜びと考えます。また、バランスしている場合であっても、大運・年運による作用でそれが崩れる時期は要注意です。

陰陽説では、自然界の全てのものを「陰」と「陽」の相反する二つの要素で相対的にとらえます。そして、これらが互いに消長し、調和することによって自然界の秩序が保たれていると解釈するのでした。¹⁸四柱推命学では、命式における「日干」と「格」という二つの要素を相対的にとらえます。そして、「均衡の原則」にしたがって、日干と格とが均衡（調和）していることを喜びます。そのため、日干と格との力関係を測ることが看命の基本となります。

なお、月支蔵干通変が「比肩」または「劫財」の場合は、これらを格とすることはできません。先に「原則として」と述べ、格は「八種類」と説明したのはこれが理由です（「比肩格」「劫財格」は存在しません）。

月支蔵干通変が「比肩」または「劫財」の場合、まずは時柱天干通変を参照します。そして、その通変が「良い通変」である場合はそれを格とします。例えば、次の命式を考えます。

【図5—8】

この命式の場合、月支蔵干の通変は「劫財」であるため、これを格とすることはできません。そのため、時柱天干にあって良い通変である「印綬」を格とします。この命式の格は「印綬格」です。

時柱天干通変でも格をとれない場合（時柱天干通変も比肩・劫財である場合、または、時柱天干通変が悪い通変である場合）、次は年柱天干通変を参照し、その通変が「良い通変」である場合はそれを格とします。

さらに、年柱天干通変でも格をとれない場合は時柱蔵干通変を参照し、それでも格をとれない場合は年柱蔵干通変を参照します。

このように、月支蔵干通変が「比肩」または「劫財」の場合は、格のとりかたが変則的になるので注意が必要です。

6 干・支の変化

干・支は、その組み合わせによってさまざまに変化し、多彩な作用が生まれます。

1 干合

十干の中には、互いに「仲良し」な干のペアがあります。そして、命式中にこのペアが揃った場合、それらの干が干合^{かんごう}し、いろいろな変化が現れます。

次の表は、干合する干のペアを列挙したものです。

【表7-1】

次の命式を例にして、干合による変化を説明します。

【図7-1】

この命式では、日干の庚と月柱天干の乙とが干合しています。このように、日干と他の干が干合したとき、他の干の通変が良い通変である場合は、その吉の作用が倍加し、悪い通変である場合は、その凶の作用が減じられます。つまり、日干に干合があるのは、基本的に喜ばしいのです。この命式では、良い通変である乙正財による吉の作用が大きくなります。

また、この命式では、日柱蔵干の甲と時柱蔵干の己とが干合しています。このように、日干以外の干

同士が干合したとき、良い通変であっても悪い通変であっても、それらの作用が減じられます。この命式では、良い通変である甲偏財も己印綬も、それらの吉の作用が減じられます。

ところで、この命式では、日柱蔵干の甲は年柱天干の己とも干合しています。このように干合が重複する（一対多になる）ことを妬合とじうといい、この状態を嫌います。

2 支合

干と同様に、支にも互いに「仲良し」なペアがあります。命式中にこのペアが揃った場合、それらの支が支合しじうして変化が現れます。

次の表は、支合する支のペアを列挙したものです。

【表7-2】

支合のある柱同士は結束が強くなるため、それらの柱にある吉の作用は倍加し、凶の作用は減じられます。つまり、支合があるのは喜ばしいのです。

先の命式を再掲し、支合による変化を説明します。

【図7-2】

この命式では、日支の寅と月支の亥が支合しています。そのため、まず日干の強さが増します。同時に、甲偏財、乙正財、壬食神による吉の作用も増します。

なお、カップルの相性を看る場合、二人の日支同士が支合していれば、大変相性がよいと判断できます。

3 方合

同じ季節を表す三つの支が揃うと方合ほうごうとなります。

【表7-3】

【図7-3】

なお、この命式では、日干の辛と日柱蔵干の丙とが干合しています。これを「自化干合じかかんごう」といい、大変良い作用をもたらします。

4 三合・半会

三合さんごうとは、子・卯・午・酉を中心とする特別な三つの支の組み合わせです。

【表7-4】

三合の支が命式中に揃っていれば、その五行の氣勢は大変強いと考えます。これを三合会局さんごうかいきょくといい、合ごう（支合しごう・方合ほうごう・三合さんごう）の中で最も重要です。

【図7-4】

5 七冲

支合が互いに「仲良し」なペアである一方で、¹⁹七冲は互いに「仲の悪い」支のペアです。次の表は、¹⁹冲する支のペアを列挙したものです。

【表7-5】

次の命式を例にして、七冲による影響を説明します。

【図7-5】

七冲には向きがあることに注意しましょう。

解冲

6 刑

7 害

8 空亡

解空

¹⁹ 七冲は、単に「冲」と略す場合があります。

9

大運・年運との組み合わせ

7 旺衰強弱

日干と格との均衡・不均衡を検討することが看命の基本であることを、先に述べました。そのためには、日干・用神の旺衰強弱おうすいきょうじやくをそれぞれ測る必要があります。

旺衰強弱を測る方法は、四つあります。

- 1 月令（げつれい）
- 2 十二運
- 3 通変による作用
- 4 干・支の変化による作用
- 5 大運・年運による作用

これらを順番に説明しましょう。

1 月令

月令（げつれい）は、干の旺衰を測る一つの指標です。命式が構成されると、日干の五行（木火土金水）が分かります。そこで、

1 日干の五行と同じ季節に生まれている

2 日干の五行を生じてくれる季節に生まれている

のいずれかの条件を満たす場合、「月令を得ている」といい、日干は盛んであるとひとまず推定します。逆に、条件を満たさない場合は「月令を得ず」といい、日干は衰えているとまずは推定します。

これと同じ要領で、用神の月令もみます。例えば、日干・用神ともに月令を得ている場合は、双方盛んで均衡が取れていると、この時点では推定できます。

いくつかの命式を例にして説明します。【図6-1】日干は「甲」ですから、その五行は「木」です。一方で、月支（生まれた月）は「寅」であり、その季節は「春」（木の季節）です。五行と季節が一致しますので、条件（1）を満たし、日干は「月令を得ている」と分かります。

一方、用神は「戊」ですから、その五行は「土」です。この場合は、条件（1）および（2）のいずれも満たしませんので、用神は「月令を得ず」と分かります。

そのため、月令だけを参酌すれば、日干対格のバランスは崩れている（日干に力が偏っている）と分かります。

【図6-2】

日干は「辛」ですから、その五行は「金」です。一方で、月支は「辰」であり、その季節は「土用」（土の季節）です。金は土に生じられる（土生金（どうきん））関係にありますので、条件（2）を満た

たし、「月令を得ている」と分かります。一方、用神は「乙」ですから、その五行は「木」です。「辰」の季節は「土用」ですが、それと同時に「春」（木の土）でもあります。そのため、条件（ア）を満たし、用神は「月令を得ている」と分かります。ここで、辰・未・戌・丑が、それぞれ春・夏・秋・冬を兼ねることに注意が必要です。つまり、辰は「春・土用」（木の土）、未は「夏・土用」（火の土）、戌は「秋・土用」（金の土）、丑は「冬・土用」（水の土）であり、例えば、辰は「土用」であると同時に「春」なのです。このように、月令を考える場合、辰・未・戌・丑の季節が変則的になるので注意しましょう。

【図6-3】 日干は「丙」ですから、その五行は「火」です。一方で、月支は「亥」であり、その季節は「冬」（水の季節）です。この場合は、条件（ア）および（イ）のいずれも満たしませんので、「月令を得ず」と分かります。一方、用神は「壬」ですから、その五行は「水」です。五行と季節が一致しますので、条件（ア）を満たし、用神は「月令を得ている」と分かります。

月令をまとめると、次の表になります。【表6-1】

第二節 十二運 十二運（補運）とは、日干・用神を基準として地支の強さを測る指標です。つまり、日干・用神から「年・月・日・時」の四つの支に照らし合わせて、どの支が強いのか、どの支が弱いかを判定した上で、日干・用神がそれぞれの程度の強さがあるかを推定するものです。十二運には、次の十二種類の分類があります。（1）長生（ちょうせい）…人間が元気よく誕生した状態（強）（2）沐浴（もくよく）…誕生した後で産湯を使っている状態（小強）（3）冠帯（かんたい）…成人式を迎えて元気はつらつとしている状態（強）（4）建禄（けんろく）…中堅として実力を発揮し、活躍している状態（強）

(5) 帝旺(ていおう)・・・成功の最頂上にいる状態(強)(6) 衰(すい)・・・やや身体が衰えてきた状態(弱)(7) 病(びょう)・・・病床にある状態(弱)(8) 死(し)・・・逝去の状態(弱)(9) 墓(ぼ)・・・墓石の奥深くに骨を埋められた状態(弱)(10) 絶(ぜつ)・・・骨・魂ともに絶無となる状態(弱)(11) 胎(たい)・・・母胎に生命が宿る状態(小強)(12) 養(よう)・・・胎内で発育し、誕生を待つ状態(小強) 十二運をまとめると、次の表になります。【表6-2】

いくつかの命式を例にして説明します。【図6-4】 まず、日干は壬です。十二運表の「壬」の列で「支」を参照し、そこから横にたどって「十二運」を特定します。すると「申」は「長生(強)」、「未」は「養(小強)」、「午」は「胎(小強)」、「亥」は「建禄(強)」であるため、日干の十二運はかなり強いことが分かります。次に、用神に対応する月支蔵干は己です。十二運表の「己」の列で「支」を参照し、そこから横にたどって「十二運」を特定します。すると「申」は「沐浴(小強)」、「未」は「冠帯(強)」、「午」は「建禄(強)」、「亥」は「胎(小強)」であるため、用神の十二運もかなり強いことが分かります。そのため、日干も用神も強い十二運に支えられて、旺していると判断できます。

【図6-5】 まず、日干は庚です。十二運表の「庚」の列で「支」を参照し、そこから横にたどって「十二運」を特定します。すると「寅」は「絶(弱)」、「戌」は「衰(弱)」、「寅」は「絶(弱)」、「子」は「死(弱)」であるため、日干の十二運はかなり弱いことが分かります。なお、衰・病・死・墓・絶の五つは、漢字から受ける印象が悪いので、それぞれス・ビ・シ・ボ・ゼとカタカナで表記しています。次に、用神に対応する月支蔵干は戊です。十二運表の「戊」の列で「支」を参照し、そこから横にたどって

て「十二運」を特定します。すると「寅」は「長生（強）」、「戌」は「衰（弱）」、「寅」は「長生（強）」、「子」は「胎（小強）」であるため、用神の十二運は強いことが分かります。そのため、日干は弱い十二運に基づいているので旺じておらず、用神は強い十二運に支えられて、旺じていると判断できます。

第三節 通変による作用 命式中にある通変に応じて、日干・用神の強さは変わります。（１）比肩・劫財…日干と「同じ五行」なので、日干は強まります。（２）食神・傷官…日干から「生じる五行」で、日干から力が洩（も）れるため、日干は弱まります。（３）偏財・正財…日干が「剋す五行」で、その力が消耗するため、日干は弱まります。（４）偏官・正官…日干が「剋される五行」なので、日干は弱まります。（５）偏印・印綬…日干が「生じられる五行」なので、日干は強まります。

第四節 干・支の変化による作用

第五節 大運・年運による作用

第六節 強さの分類

大強中強小強小強未満